

スポーツと社会生活のクロスオーバー

スポーツと社会生活がよく比較対比される。たとえば、チーム・スポーツにおける監督と選手の関係は会社における上司と社員の関係に喩えられるし、テニスやゴルフのショットにおける心理的葛藤は日常生活で求められるさまざまな決断に伴う逡巡とも似ている。

ある種の運動能力は日常生活における類似の能力とも密接に関係している。たとえば、野球の外野手が瞬時に判断する飛球の距離感と、車の運転における対向車両の距離感ほとんど同じものだろう。これは距離とスピードの相対関係の感覚である。打者が球を打った瞬間に、打球の強さ、方向、距離を瞬時に判断する能力は、猛獣が獲物を狙うような動物的な感性だ。女性の運転技術に問題があると言うとすぐに女性差別だと言われるが、そうではなくて、この種の距離とスピードの相対関係にたいする動物的感覚が女性に欠如していると考えられるべきだ。それは少し悪いの問題ではなく、より動物的な男性に備わった資質だと考えた方が理屈に合っている。もちろん、すべての男性と女性について普遍的に言えることではなく、あらゆる事象と同じように、これも確率的なものだ。男性の七割がこうした感覚に優れているとすれば、女性の場合は三割程度だというように。

長期にわたる仕事をこなしていくペース感覚は、長距離走におけるペース感覚に似ている。これは時間と距離(仕事量)との相対的な関係の感覚でもある。このペース感覚が欠如する人は挫折しやすい。長距離を走るのに、短距離のように走り始めると、早々とリタイアしてしまう。仕事で挫折する場合も、これと良く似ている。女性はイーヴン・ペースの仕事に向いていて、男性は時間と距離の相対関係が変化する変動ペースへの適応に優れているとも言える。

才能と努力

人生の成功を決めるものは何か。生得の才能か、それとも努力か。これはスポーツにおいても社会生活においても、普遍的な問題の一つだ。スポーツであれ、勉強であれ、仕事であれ、持って生まれた才能がその人の成功・失敗を決めるのか、それとも努力が占める割合の方が大きいのだろうか。

「すべての人が同じ能力と可能性を持っている」というのは嘘だ。すべての人はそれぞれ違った能力と可能性をもっている。だから、人は自らの能力の中から相対的優位性のある才能を発見し、これを伸ばすことでしか、他者との優位性を発揮することができない。

他方、個人的な能力が高い選手を集めても常勝集団を作れない。レアル・マドリドや巨人が最適の事例だ。優れたソリストを集めたとしても、オーケストラが良い音を出せるとは限らない。集団競技や集団芸術には集団的調和が必要になる。優れた個人が互いに競い合うと、往々にして、集団的な調和が崩れ、チームとしての体を成さなくなる。じつと影に隠れて他を引き立たせる役割を持つ部分があれば、全体が機能しない。チーム・プレーでは、個人的能力と同じほど、自らに課せられた課題や役割をこなしていくという別の能力も必要になる。

さて、このようなチーム・プレーにおける監督や指揮者の役割は何か。非常に明瞭な事例はJリーグ市原のオシム監督であり、わがマエストロ小林だ。選手に金をかけられない市原に有名選手はいない。わずかにD.T.阿部が五輪代表で、D.T.茶野が代表チームの補欠要員としていただけ。オシム監督が他のチームの選手の才能をうらやむほど、市原には個人的能力に優れた選手がいない。にもかかわらず、常にJリーグの上位に位置しているのはオシム監督の手腕だろう。オシム監督は選手を徹底して走らせる、役割を自覚させるということを繰り返している。特別な才能をもつ選手がいないチームが勝てる要素は、他が真似することができないほどの鍛錬と集団的調和力なのだ。

小林研一郎はどうか。彼は楽団員をその気にさせる。同じ音楽家でも、気持ちを入れて真剣に弾く場合と、いい加減に弾く場合では、音の響きが違う。オーケストラを構成するメンバーの個人的力量に絶

しかし、はつきしていることは、希有な天才的な能力を除き、人間の各種の能力差は紙一重。その差をひっくり返すことはそれほど難しいことではない。とくに肉体的なフィットネスが条件になるスポーツ競技では、才能よりも鍛錬が物を言う。たとえば、女子の長距離走の場合、日本のトップクラスの選手のほとんどは中学・高校時代に無名だった選手が多い。才能よりも鍛錬の方が成功に占めるウエイトは高い。同じことは別の視点からも言える。一流選手でも、高橋尚子は練習を三ヶ月休めば並の選手になってしまうし、引退した貴乃花も三ヶ月も稽古しなければ幕下の力士にも負けてしまう。中田だって、病み上がりからチームの核として動けるようになる

対的な限界があるとしても、オーケストラ総体の能力を最大限に引き出すことができれば良い音が出る。そのためには、すべての楽団員をその気にさせなければならぬ。その気にさせる言動や指示の出し方が指揮者のオーラを生み出し、楽団員を魔術に引き込む。楽団員が予期していないような指示や言動が、オーラを生み出す決め手になる。そういう呪術を仕込んでいることが、カリスマ指揮者のカリスマたる所以なのである。

ただ、小林が常々言うように、オーケストラでは道具としての楽器の占める役割は大きい。ハンガリーの国立フィルにはストラディヴァリウスを持っている人などいない。そこがベルリンフィルやウィーンフィルとの違い。国立フィルどころか、ハンガリー中探してもたったの一台しかないのだ。スポーツの場合には、道具の違いがこれほど大きな要素になることはない。

技術(要領)系と鍛錬系
年に一回あるいは二回しかプレーしない日本人会のソフトボール大会でも、少年時代に野球経験があればそれなりに遊べる。肉体的な衰えで足が付いていかなかったりパワーが落ちたりはするが、打撃や捕球の運動能力は小脳に記憶されているから、技術的な要領部分は生きてくる。だから、それなりに楽しむことができる。

これにたいして、走力はどうか。これは日頃の鍛錬がもろに影響する。日頃走っていないと、百米を走るのさえ、足もつれてしまう。いくら学校時代にリレーの選手や陸上競技の選手だったとしても、それは関係ない。これは技術や要領ではなく、筋力と呼吸器の能力の問題だからだ。

人間の筋力も呼吸器能力も、負荷をかけずにいれば、限りなく低下する。二三日間の休みは大丈夫

まで、かなりの時間が必要だ。肉体的な鍛錬が必要なスポーツでは、フィットネス(身体的な整備)ができていなければ最初から勝負にならない。だから、どれほど体調を管理し、かつ鍛錬できるかが成功の分かれ目になる。

興味深いことに、才能がある人ほど、努力できる。王貞治は毎晩数百回の素振りを繰り返していたことは知られている。イチローにしても松井にしても、他人が真似をすることができないほどの鍛錬をおこなっている。そうやって初めて、能力を開花させることができる。ドラフト下位で指名されたイチローが野球人として成功を収め、肉体的な能力に恵まれ入団一年目から四番を任された清原が打撃タイトル一つすらとれない現実には、才能と努力との相互関係の典型的な事例を示している。同じことは伊良部についても言える。

スポーツであれ芸術であれ、あるいは仕事であれ、成功者のほとんどが辛い鍛錬や努力を経験している。傍からはそれが見えない。しかし、努力や鍛錬を継続させる忍耐力があるかないかが、成否を決めている。その意味で、人生の成功に占める努力の割合は半分以上、つまり能力の占める割合は半分以上だと言える。この忍耐力とか努力への意欲も才能のうちと考えられるが、かなりの部分は育った家庭環境や社会環境に依存している。得てして生来の能力の高い者は自らの才能だけに頼り努力を怠りがちで、才能を活かしきれず、成功者になれないことが多い。もちろん、才能のない者が努力を怠れば、当然のこととして差が開いていく。これはスポーツだけでなく、あらゆる社会生活に共通することだろう。

監督と選手・指揮者と楽団員

野球やサッカーの監督とオーケストラの指揮者は同じ役割をもっているだろうか。実際に仕事をするだが、まず一週間休むと筋力や呼吸器能力は落ちていく。楽器の練習も同じ。だから、肉体的な能力依存度が高いスポーツ競技や楽器演奏などは、日頃の鍛錬を怠るわけにはいかない。いったん鍛錬を怠ると、再び万全の状態にもっていくために、かなりの時間が必要になる。

それでは、知力・脳力はどうか。これは技術(要領)系か、それとも鍛錬系か。人は歳とともに要領が良くなる。これは習慣的な行動から体得される技術だと考えられる。繰り返しの経験から得られる要領は、パプロフの犬と同じ単純反応。それにたいして、物事を的確に判断し行動指針を作る、生活や社会の動向にたいして明瞭な見通しと思考を維持するという知力は、知識の蓄積と新しい知識の吸収で鍛えられる。新たな情報の受容のために常に脳細胞の活性化しておく必要がある。歳とともに消滅していく脳細胞を常に刺激し、脳細胞の活性化水準を維持し、高めるためには日頃の知的鍛錬が不可欠だ。単細胞的な刺激ではなく、複雑な刺激が知力の源泉になる。

そういう知的鍛錬がないと、人間の知力は落ちていく。要領が良くなり賢くなったつもりでも、世界のこと何も分かっている。人間社会の技術水準が飛躍的に発展しても、それに比例して思ったほど個人が賢くなっていない。

これは、知力を鍛える脳細胞が技術開発や商売に必要な脳細胞とは別だからだ。心したいものだ。

